

吸血鬼のヒーローアカデミア

カラー・ロザリオ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日！一人の少年が爆発事故に巻き込まれて死亡した！しかし、彼はそれでは終わらなかつた！彼はジヨメル・ジヨバーナとして転生したのだ！その瞬間！彼の運命は動き出す！その世界では！個性”という言葉を持った人間社会が存在しており、悪用するヴァイン！正義のヒーロー！彼はヒーローとして、”吸血鬼”という”個性”をもち、運命からか”ザ・ワールド”のスタンドを得た！

彼は雄英高校に入り、その運命は大きく動き出す！

目次

ゴールド・エクスペリエンスその①	1
ゴールド・エクスペリエンスその②	7

ゴールド・エクスペリエンスその①

始まりは中国。発光する赤子が産まれたと言う”奇妙”なニュースだった。勿論誰もが信じる筈もなく、専門家までもが否定した。そして、そのニュースは人々から忘れ去られた……訳ではなかった!!

その”奇妙”は世界各地で次々に産まれた!人を越えた能力を得た赤子が次々に生まれ、その”超常”は少しずつ増えていった!

”超常”いつしか”日常”に!^夢架空”は”現実”に!それは”個性”と呼ばれるものとなる。

そして、その”個性”を悪用する^{ヴィラン}”悪”それと戦う^{ヒーロー}正義!世界はいつしかそんなふうに戻るようになった!!

「ぬうう!!灰になる前に!帰らなくては!」

俺の名前はジヨメル・ジヨバーナ。日本人さ……日本人……だよな?時々俺もこうやって自信が日本人だと言うことを疑う。そんなことよりもだ。俺は今人生最大のピンチに立っている!

俺の個性は”吸血鬼”。運動神経は人間の限界を越え、夜の帝王だ。しかし、しかしだ!吸血鬼は太陽が弱点なのだ!!幸い個性が発現したのは産まれて暫く経った後、つまりは後天性。それのおかげで人間の頃に太陽を浴びていたから少なからず耐性はある。

しかしだ!日焼け止めが尽きてしまった!随分日に当たっている!このままでは太陽にこの身を焦がされてしまう!神^{太陽}に近すぎ過ぎた英雄は翼をもがれ、地に落とされると言うがこのジヨメル・ジヨバーナ!!その翼でさえ耐えられるこの地で尽き果ててしまう!

「最後に見るのがあの太陽なんていやだーッ!!」

「日傘をさして、そうすれば日光は防げます。折り畳み式を今度から

は持ち歩いて」

「お、親父」

学校の帰り、命の危機を救ったのは親父であるジョルノ・ジヨバアーナ。今日は決して夏でも炎天下でもない。そんな日に太陽の光で死にかけている俺は端から見れば哀れなアホウドリだ。

突然だが俺は転生者である。爆発事故に巻き込まれ、飛んできた鉄工に腹をぶち抜かれて給水塔に激突し、そのまま息を引き取った。

目覚めるとそこは真つ暗でよく分からない場所にいた。体は動かせないし口から呼吸もできない……でも……心地良かった……とても安心する。どこから声が聞こえてくる。そうか、ここは母のお腹の中だ。こうして産まれた俺は、五歳に”個性”が発言した”吸血鬼”^①と言うあの個性。

親父はジョルノ・ジヨバアーナだった。ここは”ジョジョの奇妙な冒険”の世界だと最初は思った。しかし、”個性”というよりは単語を聞いたことで、この世界がどこか別の世界だと知った。

親父、ジョルノ・ジヨバアーナは日本とイギリスのハーフでありであり母さんは知らない。”スタンド”は持っていたようだが”ゴールドエクスペリエンス”であり、レクイエムの事を知らなかったりとジョジョの奇妙な冒険の5部の主人公とは少し異なっていたが、お金持ちであり、教えては貰ってないがギャングスターであるからこそその財力なのだろう。

そして10才の時、俺にも”スタンド”が発現した。”世界”^{ザ・ワールド}

だ。最も最強に近いDIOの”スタンド”だ。俺が発現してからは毎日”スタンド”の修行をした。現在でもまだ時は止められないしアニメで見たようなあのパワーよりも少し劣る。が、射程距離は十メートルと、14才の俺にしたは上出来だと思う。100才越えのDIOとは違い成長期の俺ならもつと強くなる。

そして今、俺はヒーローになるために雄英高校を受験するために志願書を貰った帰り道、俺は死にかけた。今こそ。

「親父、俺はヒーローになる。なのに何故許可をしてくれない。その為の準備はしてきた」

前々から俺は親父にヒーローになる！と宣言した。しかし、親父は一向に認めなかった。ただひとつ、「準備はしておいてくれること」とまるで認めてくれたような事を行った。

「本当に、準備をしてきたのですね」

ジオルノはそう言うのと近くの公園に寄った。少し広い公園。いつもなら誰かしらはいるが今日は偶然にも誰もいなかった。

「ああ、してきた！ヒーローになるために、この9年間！」

「……そうですか、してきたんですね。『覚悟』の準備を」

その瞬間、”ゴールド・エクスペリエンス” の拳が俺の腹に入る。

「ぐう?!」

突然の攻撃に少し怯むがすぐに距離をとる。

「いきなり何するんだ！」

”ヒーロー”とは、戦う運命を背負う事です。『覚悟』が無ければ潰されてしまう、いや、倒されてしまう」

親父は俺から数歩離れ、俺の方へ真っ直ぐと見据え、目を見る。

「僕に決定打を与えるんだ！」

「なあにいいいい!!!」

親父は”ゴールド・エクスペリエンス”を構える。

「いいか！僕は”^{サイラン}敵”だ”悪”だ！”^{サイラン}君の”正義”が『真実』から出たものなのか、それとも上っ面だけの『邪悪』からなるものなのか、その心は滅びずにいられるかな、ジヨメル」

まさか、親父と、ジオルノと戦うことになるなんて、だが、『覚悟』の準備か……そんなものは……

「ザ・ワールド!!」

俺はザ・ワールドを出しジオルノにその拳を叩きつけるようとする。

「ゴールドエクスペリエンス！」

ジオルノは拳を地面に叩きつける。するとその地面から木が生え、急激に成長する。どんどん高く太くなる木にザ・ワールドの拳は防がれた。

「そんなものじゃあ俺のザ・ワールドは止まらない！無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄!!」

瞬く間に木の幹は折れ、木は倒れる。しかし、木の先にジヨルノはいなかった。

「まさか！倒れた木にしがみついて俺の死角に！」

俺は倒れた木の枝が生い茂るてっぺん辺りを見るがジヨルノはいない。

「じゃあいったいどこに！」

「無駄ア!!」

「なにいいい!!ぐうう!!前からだとお?!木を折った先の前にいなかったのに！その前からジヨルノは現れた！」

俺は軽く後ろに吹っ飛ぶ。ゴールド・エクスペリエンスのパワーは決して高くないのが幸いだ。もしパワー型だったら吸血鬼の体とは言え負傷は避けられなかった！

「ヒーロー」なら、細かく見るべきだ。僕はただ、しやがんだだけだ。折れた木よりも低くなるように」

「そんな単純な手に！だが、木を生やしたのは間違いだったなあ!!無駄無駄無駄無駄無駄無駄ア!!」

俺は木を殴り大雑把だが何等分かに切り分け丸太を作る。そのひとつを持ち上げザ・ワールドの掌で思いつきりぶん殴りジヨルノへ飛ばす。

「時速160キロを越えた丸太を簡単に防御することは不可能！生物に変えた所でその勢いと衝撃は消えない！なら打ち返すかあ?!メジャーリーガーのバッターがここぞと言うときにホームランを打つように！ゴールドエクスペリエンスと言うなのバットをつかってえなあ！」

「ゴールドエクスペリエンス!!木を成長させろ！」

「無駄無駄ア！折れて地面から離された木が成長すると思うかあ?!」

「ぐう!!」

ジヨルノは両腕で防御するが勢いは死なずにジヨルノの体は後ろにある鉄棒まで飛ばされる。

「まだ丸太は残っているぞお!!」

再度丸太を飛ばす。今度は避けられる距離は充分にある。しかし、ジオルノは避けるどころかまともに食らった!その瞬間!ジオルノの体は後ろへぶっ飛ぶ。しかし!鉄棒を掴んだ!ジオルノの運動エネルギーは後ろから鉄棒を軸に回転し!前へと!その方向を変えた!

「避けるんじゃない!避けた所で単純に体が頑丈なジヨメルには僕の攻撃は決定打にかける。しかし!君自身の攻撃なら!君自身がつけた勢いなら!この拳は、強く伝わる!」

「その『覚悟』は!それほどまでに!だが、そんな勢いじゃあザ・ワールドの拳は避けられない!」

こつちへ向かってくるジオルノにザ・ワールドの拳を叩きつけようとする。しかし、ジオルノの手には何か棒のようなモノが握られていた!

「それは、鉄棒?!」

「そうだ、今の僕に君の攻撃は避けられない。だが!まともに食らうつもりはない!」

ジオルノは鉄棒を斜めにしてザ・ワールドの拳に当てる。そしてジオルノ自身はそれにそうように身体を当てる。

「受け流しただと?!だが拳はまだある!」

俺はもうひとつの拳を振る。その瞬間、ジオルノのてんとう虫のブローチから何かが弾け飛んできた!

「なんだ!……しまったあ!」

それはどうってことのない、別に痛くも痒くもない物だったし。しかし、いきなりのそれに俺は咄嗟に左手で防御してしまった。そして、その咄嗟からスタンドも同じ操作をしまいせつかく振った拳が外れてしまった。

「ガマの穂は弾けるんだ。植物の中でも特にね」

俺の拳は右腕だけだった。しかし、その右腕はゴールドエクスペリエンスの両手に捕まれて行動不能になっていた。

「場数が違う!実践が今日が初めての俺には到底決定打を当てること

はできない！」

ジョルノは勢いそのまま俺にその鉄の棒を刺す。おれ自身が入れた決定打になる攻撃は逆に、俺自身への負傷へと形を変えた。

ゴールド・エクスペリエンスその②

「なあにいいいい!!!」

俺のパワーを利用して逆に向かってくるくるとおお?! やはり親父は! ジョルノ・ジヨバーナは強い! この俺に! 鉄棒を突き刺した! 実の息子にここまでやるとはな。だが! ザ・ワールドの攻撃を上手くかわしたとはいえ、俺の手を塞ごうとゴールド・エクスペリエンスは 掴んでいる!! 次はかわせまい!

「くらえ!」

ザ・ワールドの拳を上からジョルノに叩き込む。そして、俺の手や顔、胸元から血が噴き出した。

「な……何が……起きたんだ?」

わからない。本当に何が起きたんだ? 俺は今確かに殴った。だが、怪我をしているのは俺の方だ。

思考を巡らせていると、黒い虫が一匹飛んでいた。まさか、『反射』か?! いやちがう。木を殴ったときは発動しなかった。つまり、ゴールド・エクスペリエンスには既に反射能力は消えているんだ! じゃあ何故だ? ん? ……何だ? 辺りに、あの『虫』と同じ色のような何かが辺りに散乱している?

『クロカタゾウムシ』。この『虫』の名前です。世界で一番硬い虫と言われているみたいです」

世界一硬い? 虫、同じような色、散乱

「まさか?! 俺が殴ったのは『クロカタゾウムシ』! そう言うことか! ……くそ! まただ! また利用された!」

「ええ、また利用しました。クロカタゾウムシはたとえ踏みつけても平気です。標本にするときはテープを使うしかないとか。どこかの民族ではその虫を潰せるかどうかで力を試していると、何かの本で読んだことがあります。」

ザ・ワールドのパワーは確かに高いです。クロカタゾウムシも簡単に碎けます。しかし、碎けるほどのパワーをあんなスピードで殴られた虫は碎け、その硬い体を手榴弾のように飛び散らせます。もう一匹

誕生させて僕は防ぎましたが、しかし吸血鬼……この程度では無傷と言っても過言ではない」

ジョルノが説明している間に俺は吸血鬼特有の再生能力でその傷を最初っからなかったかのように、傷1つ無い体になる。

「無傷とわかっててもやったということは、スタミナ切れを狙っているんだろ。鉄棒が刺さった所も再生しているが、流石に何百回も食らったらフルマラソンでも走り終えているだろうな」

身体能力と言う点では俺の方が上だ。けれど親父はその先に既にいる。しかも血を吸った所で血を作られて終わりだ。『技』と『技術』で負けているんだ。こちらにはない、その2つが。どうする。同じ吸血鬼でもDIOと俺では天と地程の差がある。俺には『センス』がない……DIO?……デイト?

「そうだ！俺は『吸血鬼』だ！吸血鬼じゃあない！ならある！『技』が！オラア！」

俺は公園の水呑場を壊す。水が噴水のように噴き出し、辺りを水浸しにし始める。そして俺は公園の中心にある砂場へ向かった

「ゴールドエクスペリエンスは『生命』！寒さには弱い！大量の砂を水で濡らし！槍のように鋭くする！そして、『気化冷凍法』！」

水で濡れた砂は鋭く固まり、それをザ・ワールドに持たせる。

「どうた親父！氷の攻撃は防げまい！くらえ！」

砂の槍をぶん投げた。ジョルノはゴールド・エクスペリエンスでその槍を砕こうとした。しかし、それを急ぎよ変え、足元を叩き木を誕生させる。

「……何故水を凍らすのではなくわざわざ砂にしたか、そう言うことですか」

槍は木を貫通はしたもののジョルノに刺さるほどの勢いは無くなっていた。

「しかし、問題は貫通した事だ。氷なら貫通する衝撃に耐えられず砕け散る。しかし、雨上がりで固まった砂は固く、軽く転んだだけでも血が出るほどに。それをさらに氷で固めたなら、それはとても頑丈な武器になり得る」

「そう言うことだ。そして砂は沢山ある。何発で終わるかな？」

その瞬間、ジヨルノに無数の槍が飛んでくる。

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄！」

ジヨルノは地面を叩きまくって木やゾウ等の『生命』を誕生させ、『氷』で固めた砂の槍を防いでいく。しかし、どういうわけから途中でゾウは産まれなくなり、木も成長が鈍く、大きくならなかった。

「『氷』で固めた砂が！触れたものを凍らせている?!」

「今度は……こっちが利用させて貰った……生命は『凍る』無機物の砂や砂利と違って……凍れば当然『冷氣』が出る。そうすればその近くの温度は急激に『下がる』！」

温度が低ければ当然生物が産まれる環境ではなくなる。

「これで終わりだ！親父！」

俺は親父に向かって走り出す。その瞬間、足首に激痛が走る。

「な?!」

足首は小さな魚に噛まれていた。血が勢いよく噴き出す。小さくもここまで身をえぐるほどの噛む力を持つ魚、それは

「ピラニアだ！しかし何故だ！いくら水浸しとは言え魚が泳げる深さは破壊した水呑場しか無いはずだ！離れているここにはこれない！……は?!」

何10匹ものピラニアが俺の至るところに噛みつく。そして、充分な深さが近くにあった。それは、

「砂場だ！俺がその砂を武器として使ったから、砂が無くなりそこに水が溜まって水槽のようになってるんだ！」

そこに泳いでいるピラニアが一斉に飛び付く

「気化冷凍法！」

「『凍れば』周囲の温度が『下がる』それはジヨメルが言ったことだ!?!」

俺を覆い尽くす程の影が出来る。最初は俺よりも慎重がたかいジヨルノがすぐそこまで来ていると思った。しかし違った

「しかし、低い温度でも生息できる『生命』もある」

それは大きくて白色の毛が全体を覆う。それはきつと寒過ぎ

笑う。

「僕は『決定打』を食らってしまった。僕の負けですね。これは予想外でした」

予想外、それを聞いて俺はこう言った

「次にお前は、『拳まで凍ってしまうとは思ってもいませんでした』と言う」

「拳まで凍ってしまうとは思ってもいませんでした……は?!」

「確かに水を凍らせても凍るのは足だけ。腕には到底届かない。だが、今日は太陽丸出しの『晴れ』だ。そんな日に水浸し何かしてしまえばその湿度は高くなる。公園全体を凍らすほどの気化冷凍法なら湿度の高い空気を凍らす……ことも不可……能では……な……い……」

あれ……めまえが……力も……はい……らない……」

ドサ

俺はその場で気を失ってしまった。それを見届けたジヨルノはゴールド・エクスペリエンスで氷を砕き俺の元へ歩み寄る。そしてゴールド・エクスペリエンスで俺をお姫様抱っこをし体のパーツを作った。本人は日傘をさして俺を日光に当てないようにする。

「ジヨメル、君は下校の時点で既に太陽の光を沢山浴びていたのに戦いが始まってから一度もそれを理由に逃げもせず、立ち向かったその『覚悟』。見させてもらいました。そして、貴方の策は自然と『殺す』のではなく『無力化』するものになっていました……ジヨメル、君は”ヒーロー”になれる。雄英高校、頑張ってください。君ならできます。ジヨメル、君は僕の誇りに思う息子なのだから」

治療を終えたゴールド・エクスペリエンスは日傘を持ち、ジヨルノは俺をおんぶして真っ直ぐ家へと歩きだした。